

## 咳喘息におけるレスター咳問診票 (LCQ) の臨床的意義

金光禎寛 新実彰男 松本久子 伊藤功朗 小熊毅 井上英樹 田尻智子 岩田敏之  
長崎忠雄 三嶋理晃  
京都大学大学院医学研究科 呼吸器内科学

【目的】LCQは身体面(Ph)、精神面(Ps)、社会面(S)に関する質問を含んだ咳に関するQOLの問診票であり、喘息患者において咳の頻度と相関することが知られているが、咳喘息との相関については明らかにされていない。我々は咳喘息患者におけるLCQ日本語版の臨床的意義を検討した。

【方法】2009年7月から2011年6月に当科で147名が咳喘息と診断された。現喫煙者と10pack-years以上の過去喫煙者を除いた121名のうち、LCQが施行できた109名(女性78名)を対象とし、呼吸機能、呼気NO濃度、気道過敏性、IOS、末梢血・喀痰中好酸球比率、血清総IgE値、特異的IgE、GERD問診票 (FSSG, QUEST) とLCQとの相関をSpearmanの順位相関係数を用いて検定した。

【結果】LCQPh、Ps、Sの平均はそれぞれ $4.62 \pm 1.11$ 、 $4.02 \pm 1.35$ 、 $4.07 \pm 1.58$ で、3領域の合計 (T) の平均は $12.7 \pm 3.70$ だった。総IgE値はLCQPh、Ps、Sのすべてと負の相関を示し ( $r = -0.27, -0.21, -0.21$ ;  $p = 0.008, 0.03, 0.04$ )、Tとも負の相関を示した ( $r = -0.25$ ;  $p = 0.01$ )。また、FSSGはPhと負の相関を示した ( $r = -0.21, p = 0.03$ )。

【結語】LCQは咳喘息においてGERD症状や総IgE値と関連して低値になることが示唆された。